

## ニ格とデ格の交替について

張 麗 (大東文化大学)

### The Alternation of Auxiliary Word Ni and DE

Zhang Li(Daito Bunka University)

#### 1. はじめに

(1) ~ (4) が示すように、「とる」「もつ」「かかえる」「だく」のような動詞は格体制の交替 (~ヲ~ニ形と~ヲ~デ形) を起こす。

(1a) 彼女はグラスを手にとり、一口飲んでみた。

(海老沢泰久『男ともだち』講談社 1998)

(1b) 茶碗を右手でとり、左手で扱って、右手で勝手付に仮置きする。

(千宗左『小棚の点前』主婦の友社 1990)

(2a) すると、雑誌を手にもって農家の人が大勢たずねてくるようになった。

(横森正樹『夢の百姓』白日社 2002)

(2b) ときどき六寸ぐらいある基盤を片手でもって、五十匁蠟燭の火を団扇のように煽り消したそうです。

(甲野善紀等『オール讀物』文芸春秋 2004)

(3a) C 男がにわとりを小脇にかかえてしじゅう持ち歩く姿は、幼稚園のなかではいやでも目に付いた。

(友定啓子『子どもの心を支える』勁草書房 1999)

(3b) 彼はほとんど沸き返るようなコーヒーの入った陶製のカップを両手でもって、その上に身をかがめて、湯気の芳香楽しみながらすすった。

(ウィルバー・スミス著 飯島宏訳『飢えた海』文藝春秋 1995)

(4a) 五歳ぐらいの男の子をうでにだいて、わらっている。

(朝比奈蓉子『へそまがりパパに花たば』ポプラ社 1992)

(4b) ひざを両手でだきながら、『おれ、ここに、いる』と、口をぱくぱくうごかして、

(浜田糸衛『金の環の少年』国土社 1987)

本稿では、「とる」「もつ」「かかえる」「だく」四つのふれあい動詞のニ格とデ格の交替を考察する。

#### 2. 先行研究

##### 2.1 ニ格・デ格についての先行研究

国語学、日本語学からニ格・デ格の分類について、国立国語研究所 (1951)、言語学研究会 (1983)、益岡・田窪 (1987) が挙げられる。第二言語習得から、迫田 (1998) などの研究がある。認知言語学から、山梨 (1995)、菅井 (1997) (2000)、森山 (2005) (2008) が挙げられる。

##### 2.2 壁塗り構文のニ格とデ格の交替

格の交替現象が起こるデ格とニ格を中心とする先行研究は川野 (2012) などがある。

今までニ格、デ格についての研究は主にニ格、デ格それぞれの分類を中心としている。

更に、場所を表すニ格とデ格の混同やニ格の過剰使用についての研究もなされている。ニ格とデ格の交替についての論文は少し見られたが、主に壁塗り構文の交替に焦点を置き、(1)～(4)のようなふれあい動詞のニ格とデ格の交替についての研究は、管見の限り少ない。「とる」「もつ」「かかえる」「だく」はニ格とデ格の交替が可能だと言われるが、それぞれニ格とデ格の使用率はまだ明らかにされていない。先行研究(言語学研究会 1983: 309)ではに格の名詞は主に身体の部分(とくに手)をしめすものであると指摘しているが、「手に～」以外にどんな表現があるかまだはつきりわからない。また、どんな場合、交替ができるかも分からない。

先行研究ではニ格は古い道具を示す指摘もあり、空間の意味を示す研究もある。本稿ではデ格は道具性を表し、ニ格は空間性を表すと考える。

### 3. 研究の目的

本稿では、「とる」「もつ」「かかえる」「だく」四つのふれあい動詞を取り上げ、以下の三つの問題を明らかにすることを目的とする。

- ① 四つの動詞それぞれニ格とデ格の使用率はどちらが高いか。
- ② 四つの動詞の～ヲ～ニ形は「手に～」以外にどんな表現があるか。
- ③ ～ヲ～ニ形と～ヲ～デ形はどんな場合に交替可能なのか。

### 4. 調査方法

本稿では、『現代書き言葉均衡コーパス(中納言)』を通して、短単位検索で「とる」「もつ」「かかえる」「だく」について調べる。～ヲ～ニ/デ形と～ニ/デ～ヲ両方使用される可能性があると考え、二つの順序で検索したのである。具体的な調査方法は以下のようなものである。

#### 4.1 ～ヲ～ニ/デ形についての調査

「とる」は「書字形出現形」が「と[る、り、って、った]」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「[に、で]」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

「もつ」は「書字形出現形」が「も[つ、ち、って、った]」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「[に、で]」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

「かかえる」は「書字形出現形」が「かかえ」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「[に、で]」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

「だく」は「書字形出現形」が「だ[く、き、って、った]」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「[に、で]」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

#### 4.2 ～ニ/デ～ヲ形についての調査

「とる」は「書字形出現形」が「と[る、り、って、った]」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」が「[に、で]」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

「もつ」は「書字形出現形」が「も[つ、ち、って、った]」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」

が「[に、で]」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

「かかえる」は「書字形出現形」が「かかえ」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」が「[に、で]」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

「だく」は「書字形出現形」が「だ[く、き、って、った]」、前方共起 1 は「書字形出現形」が「を」、前方共起 2 は「品詞」の「大分類」が「名詞」、前方共起 3 は「書字形出現形」が「[に、で]」、前方共起 4 は「品詞」の「大分類」が「名詞」で検索する。

## 5. 調査の結果

### 5.1 ~ヲ~ニ/デ形の調査結果

~ヲ~ニ/デ形で検索して得た用例数

	~ヲ~ニ形	~ヲ~デ形
とる (使用率%)	152/500/674 (30.4)	4/500/674 (0.8)
もつ (使用率%)	30/178 (16.9)	2/178 (1.1)
かかえる (使用率%)	12/24 (50)	7/24 (29.2)
だく (使用率%)	7/8 (87.5)	1/8 (12.5)

「とる」が 674 例ヒットし、その中の 500 件が表示された。~ヲ~ニ/デと判断できる例を数えたところ、~ヲ~ニ形は 152 例に対し、~ヲ~デ形は 4 例にとどまった。

「もつ」が 178 例ヒットした。~ヲ~ニ形は 30 例に対し、~ヲ~デ形は 2 例しかなかった。

「かかえる」が 24 例ヒットした。~ヲ~ニ形は 12 例あり、~ヲ~デ形は 7 例あった。

「だく」が 8 例ヒットした。~ヲ~ニ形は 7 例に対し、~ヲ~デ形は 1 例しかなかった。

### 5.2 ~ニ/デ~ヲ形の調査結果

~ニ/デ~ヲ形で検索して得た用例数

	~ニ~ヲ形	~デ~ヲ形
とる (使用率%)	2/500/1145 (0.4)	9/500/1145 (1.8)
もつ (使用率%)	9/500/1310 (1.8)	0/500/1310 (0)
かかえる (使用率%)	5/37 (13.5)	6/37 (16.2)
だく (使用率%)	0 (0)	0 (0)

「とる」が 1145 例ヒットし、その中の 500 例が表示された。～ニ～ヲ形は 2 例あり、～デ～ヲ形は 9 例あった。

「もつ」が 1310 例ヒットし、その中の 500 例が表示された。～ニ～ヲ形は 9 例あり、～デ～ヲ形は 0 例であった。

「かかえる」が 37 例ヒットした。～ニ～ヲ形は 5 例あり、～デ～ヲ形 6 例あった。

「だく」が全無であった。

## 6. 考察

### 6.1 研究目的①への回答

～ヲ～ニ/デ形で検索したところ、四つの動詞は二格の使用率が全部デ格の使用率より高いということがわかった。つまり、このような動詞の二格は「道具性」より、「空間性」で見られる場合が多いと言える。

～ニ/デ～ヲで検索したところ、「とる」と「かかえる」は二格の使用率と比べ、デ格の使用率が高いことが分かった。「もつ」はデ格の使用率が 0% であった。「だく」は二格とデ格の使用率が全部 0% であった。

以上から、デ格・二格と動詞の距離によって、使用率が異なることが分かった。二格・デ格が動詞に近いほう、つまり～ヲ～ニ/デ形のほうは、四つのふれあい動詞の使い方が安定しており、同じ傾向が見られたが、二格・デ格が動詞に遠いほう、つまり、～ニ/デ～ヲ形の使い方にばらつきがあると思われる。

### 6.2 研究目的②への回答

先行研究では、(言語学研究会 1983 : 309) に格の名詞は主に身体の部分(とくに手)をしめすものであると述べている。今回の調査では、そういう傾向が見られた。更に、手以外の用例もいくつかみつかった。

「とる」

「Nにとる」表現は全部で 153 例であり、「手(右手/両手/掌)にとる」用例数は 139 例であった。そのほかを含めて以下の表にまとめる。

Nに	手	頭上	右肩	腕	右腰	ひざ	カード	ボール	テー プ	綿棒	バケ ツ	容器
数量	139	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

「手にとる」以外の例文は以下のようなものである。

(5) 刀を頭上にとり (6)、重さで降ろした後、膝を囲う姿勢をとり残心…

(小山将生『目で見て学ぶ居合道新陰流』体育とスポーツ出版社 2005)

(6) 抜き付けの余勢で刀を右肩にとり撥草になる (4)。

(小山将生『目で見て学ぶ居合道新陰流』体育とスポーツ出版社 2005)

(7) 彼は女を腕にとって抱き寄せた。

(シドニイ・シェルダン著 木下望 訳 『氷の淑女』徳間書店 1997)

(8) 刀を引き抜きつつ右膝を床に着き (8)、刀を右腰にとった構えを示した後…

(小山将生『目で見て学ぶ居合道新陰流』体育とスポーツ出版社 2005)

(9) 竜子が脱いだスリッパを膝にとって視入った。

(矢田津世子『新・ちくま文学の森』筑摩書房 1996)

(10) 事項をカードにとったら、それに出てくる人名もカードにとって…

(渡部昇一 『知的生活の方法』講談社 1976)

(11) 3 ヨーグルトをボールにとり、いったクミンシード、唐辛子粉、塩を入れてよくかきまわす。

(オッキア・シン 『シンさんの印度料理夜話』NTT 出版 1997)

(12) 一度でも実際の会話や口述をテープにとり起こしてみると誰にでもわかる。

(盛山和夫『社会調査法入門』有斐閣 2004)

(13) 下まつげは、いったんブラシから液を綿棒にとると塗りやすい。

(分担不明『The マスカラ book』学習研究社 2004)

(14) おばあさんからは、米を研いだ水をバケツにとっておき、後で緑こけむした庭石に、ひしゃくでやさしくかけてやります。

(北阪英一『東洋鬼』日本文学館 2005)

(15) さて、ヒトの血液を容器にとり、これら抗凝固剤を加えて放っておくと…

(平田剛士『そしてウンコは空のかなたへ』金曜日 2004)

### 「もつ」

「Nにもつ」表現は全部で 30 例であり、「手（両手/片手/左手/右手/手元）にもつ」用例は 22 例であった。そのほかの用例を含めて以下の表にまとめる。

Nに	手	胸	頭	腕	身	心
数量	22	4	1	1	1	1

「手にもつ」以外の例文は以下のものである。

(16) この星を胸にもつあなたは、生涯食べ物に不自由しません。

(和泉宗章『算命占星学入門』青春出版社 1978)

(17) 新しい統治階層を頭にもつ新しい社会、そして新しい国民経済ウクライドである。

(土肥恒之『西洋世界の歴史』1999)

(18) 四人は七つの（封印）を腕にもって以来、じつにさまざまな恐怖を味わってきた。

(カイ・マイヤー（著）山崎恒裕（訳）『マンドラゴの恐怖』)

(19) 自分の身ぶりを身にもつこと一どどのようにして？

(長田弘『読書百遍』岩波書店 1986)

(20) お母さん、自分は自分として、皆きれいなものを心にもっているんだよ。

(実著者不明『心に残るとっておきの話』潮文社)

### 「かかえる」

「Nにかかえる」用例は全部で 12 例であり、「手（両手/片手/左手/右手/手元）にかかえる」用例は 1 例であった。そのほかの用例を含めて以下の表にまとめる。

Nに	手	小脇	腕	胸
数量	1	8	2	1

「手にかかえる」以外の例文は以下のものである。

(21) C 男がにわとりを小脇にかかえてしじゅう持ち歩く姿は、幼稚園の中ではいやでも目に付いた。

(友定啓子『子どもの心を支える』1999)

(22) スタンプは別の問題だ—食料品の紙袋を腕にかかえて、自動ドアを通り、  
(マーガレット・アトウッド著 大浦暁生訳『食べられる女』新潮社 1996)

(23) そして、風呂敷包みを胸にかかえ、足を北へと向ける。  
(清め野塩『雪の積む里』文芸社 2004)

「だく」

「手にだく」の用例は0であった。ほかの用例は以下の表にまとめる。

Nにだく	膝	胸	腕	おなか
数量	3	2	1	1

(24) これからは、毎晩、抜身をひざにだいて、青い目さんの門先の敷居ぎわに、寝るつもりです。

(リヒャルト・レアンダー著 国松孝二訳 ふしぎなオルガン 岩波書店 1987)

(25) 女は赤ん坊を胸にだき、赤ん坊の足の下に女の子が頭を入れて…  
(田中小実昌『香具師の旅』河出書房新社 2004)

(26) 四、五歳くらいの男の子をうでにだいて、わらっている。  
(朝比奈蓉子『へそまがりパパに花々を』ポプラ社 1992)

(27) みえないくらいにちいさなくうきのあわをおなかにだいて。  
(いしいじんじ『ぶらんこ乗り』新潮社 2004)

以上から、ニ格とふれあい動詞の結びつきは、ニ格の名詞は主に身体の部分をしめすものであることが先行研究と同じ結論が得られた。しかし、身体表現以外の表現もあることが今回の調査でわかった。「Nにとる」はカード、ボール、テープ、綿棒、バケツ、容器のような道具を表す名詞も使われることが分かった。

### 6.3 研究目的③への回答

～ヲ～デ形の実例は以下のようなものである。

「とる」

Nでとる	右手	ペーパー
数量	3/4	1/4

(28) 茶碗を右手でとり、7左横、右手前でなつめとおき合わせる。  
(千宗左『小棚の点前』主婦の友社 1990)

(29) 油を熱して6を入れ、転がしながら焼きつけて焼き色をつけ、脂をペーパーでとる。  
(実著者不明『おせちと気軽なおもてなし』学習研究社 2004)

「もつ」

Nでもつ	両手/片手でもつ
数量	2/2

(30) 椅子に座っているなら座ったまま、片方の膝の後ろを両手でもち、ゆっくりと足を引き上げる。

(実著者不明『たった「疲れ」が驚くほどとれる本』永岡書店 2003)

(31) とときどき六寸ぐらいある基盤を片手でもって、五十匆蠟燭の火を団扇のように煽り消したそうです。

(オール讀物編集部『オール讀物』文藝春秋 2004)

### 「かかえる」

Nでかかえる	腕/右腕/両腕でかかえる	両手でかかえる
数量	4/7	3/7

(32) わたしは、今度は、ロッドを右腕でかかえた。

(喜多嶋隆『ルアーに恋した日』光文社)

(33) ルシファードはプレイン・ギヤをかぶった頭を両手でかかえ、わめいた。

(津守時生『三千世界の鴉を殺し』新書館 2001)

### 「だく」

Nでだく	両手でだく
数量	1/8

(34) 右太はお婆のひざにぐったり頭を落とすと、ひざを両手でだきながら…

(浜田糸衛『金の環の少年』国土社 1987)

以上、「手にとる」「手にもつ」「手にかかえる」と「手でとる」「手でもつ」「手でかかえる」の用例が全部見つかり、「とる」「もつ」「かかえる」の二格とデ格の交替可能な用例は身体の部分「手」と結ぶことであると思われる。また、「かかえる」のもう一つ交替可能な用例は身体の部分「腕」と結ぶことであると考えられる。

## 7. おわりに

本稿では「とる」「もつ」「だく」「かかえる」四つのふれあい動詞の二格とデ格の交替について考察した。デ格・二格と動詞の距離によって、使用率が異なることが分かった。どんな場合に二格とデ格の交替が可能なのか、また「手に～」以外の表現も調査で明らかにした。二格はほかの助詞との交替を今後の研究課題とする。

## 文献

言語学研究会 (1983) 『日本語文法・連語論』 むぎ書房

川野靖子 (2012) 「現代日本語の動詞「詰める」「覆う」の分析—格体制の交替の観点から—」『埼玉大学紀要(教養学部) 第48巻第2号』

国立国語研究所報告 3 (1951) 『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』 秀英出版 pp135-151

迫田久美子 (1998) 「誤用を生み出す学習者のストラテジー場所を表す格助詞「に」と「で」の使い分け—」『平成10年度日本語教育学会秋季大会予稿集』 pp128-134

菅井三実 (1997) 「格助詞「で」の意味特性に関する一考察」『名古屋大学文学部研究論集

文学 43』 pp23-40

菅井三実 (2000) 「格助詞「に」の意味特性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要 第2分冊 言語系教育・社会系教育・芸術系教育 20』 pp13-24

益岡隆志 田窪行則 (1987) 『格助詞 日本語文法 セルフ・マスターシリーズ 3』  
くろしお出版 pp4-5

森山新 (2005) 『認知言語学的観点を取り入れた格助詞の意味のネットワーク構造解明とその習得過程 (平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究 基盤研究 (C) (2) 課題番号 14510615 研究代表者: 森山新) 成果報告書』

森山新 (2008) 「認知言語学的観点からの格助詞ヲ、ニ、デの意味構造とその習得ー中国語を母語とする日本語学習者を中心としてー」(台湾大学大学院との第2回所インドゼミ: お茶の水女子大学) 『大学院教育改革支援プログラム「日本文化研究の国際的情報伝達スキルの育成」活動報告書 平成19年度 海外研修事業編』 pp240-244

山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房  
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』